

## <発達支援講演会を開催しました>

令和3年11月19日（火）に、町内在住の方、教育・保育・療育にかかわる方を対象として発達支援講演会を開催いたしました。今回は、久保山 茂樹先生（国立特別支援教育総合研究所インクルーシブ教育システム推進センター センター長）より「子どもも大人も いま ここ を大切に！—子育ての合言葉は それでいいよ だいじょうぶ—」という保護者向けのテーマで、久保山先生がこれまで出会ってきた家族との事例を基に、子育てや支援について講演していただきました。その講演の内容をいくつか紹介します。

### ○「親子の歴史」に誇りを持ちましょう

日々、懸命に子育てしているからこそ、保護者は子育ての悩みや苦しさを背負い込んでしまったり、自分を責めてしまうことがある。子育ての責任を家族だけで背負わずに、周りにいる人に思いを打ち明けることが大切である。子どものことを気にかけてくれる人を増やし、いろいろな人の力を借りながら、みんなで育てることで、心にゆとりを持って子どもと関わることにつながる。子育てしていると、自分のことは後回しになってしまいがちだが、親としての自分を休んだり、自分の時間を作ることで、自分自身の生き方も大切にしてほしい。それぞれの親子には、それぞれの親子だけが共有してきた「歴史」があり、親として、先生として、逃げずに子どもと生きてきた「歴史」がある。自分なりに今まで頑張ってきたことを振り返り、「それでいい」「だいじょうぶ」を合言葉に、自分なりの育児を大切にしてほしい。



### ○子どもの味方になりましょう

子どもにとって必要な支援とは、“できないことをできるようにすること”や“能力を身に付けること”ではない。自己肯定感を持てるように、子どもが今できることや好きなことを、より豊かにすること、子どもの味方になること、周りの関わりや環境を変えることが大事である。子どもにとって得意なことはその子の心の芯になり、楽しいことの積み重ねは能力になる。大人は、子どもを捉えようとする中で、「気になること」に隠れてしまっている、その子の良さや得意分野、その子が役に立つこと、今持っている力でできること、魅力に焦点を当て、持っている力を十分に発揮できるためのかわりを考えていくことが大切である。

### ○共生社会の形成に向けて

共生社会とは、「誰もが相互に人格と個性を尊重し、支え合い、人々の多様なあり方を相互に認め合える全員参加型の社会」である。そのような社会の実現のためには、まず、大人が多様な価値観を持つことが求められる。障がいのある子ども達が、周りに適応するために頑張り続け、努力するのではなく、様々な考え方やペースがあってよいということを、大人が率先して示していくことが重要である。「みんな同じだ」と思っていると、ちょっとした「ちがひ」が気になり、人間関係が悪くなる。「みんなちがうんだ」と思っていると「おなじ」を見つける喜びがある。多様な人々がいると想像できる人を、保育や教育の現場で育てていくことが大切である。